

○イラク、政府はクリスマスを国民の祝日と宣言○

ローマ、2013年12月23日。

イラク政府はカルデア教会の主教の提案を受け入れ、12月25日を全国民のための祝日で休日とすると宣言した。バグダッドの政府による少数派の宗教を尊重する姿勢を示す新しい重要な行為である。すでに政府は、10年前から始まった少数派共同体の「脱出」を食い止めるために彼らへの連帯を示そうと、ティグリス川の畔に5メートルほどのクリスマスツリーを飾っている。この木は、スンニ派とシーア派のイスラム教徒とキリスト教徒が平和裏に暮らしているカラダ地区に置かれている。今日の『アジア・ニュース』で **Joseph Mahoud** がそう伝えた。

先週、カルデア教会の **Mar Louis Raphael I Sako** 主教は、イラクの総理大臣ヌーリー・マリーキ **Nouri al-Malki** (写真) に手紙を送り、12月25日を「すべてのイラク人の休日」と宣言するよう頼んだ。それは何世紀にもわたって国の発展に積極的に貢献してきた「共同体」の価値と重要性を認めることになる、と。



その手紙で主教は、「イエスはキリスト教徒のためだけでなく、すべての人々のために来られた」と言い、イスラム教徒が彼に対してもつ「特別の敬意」示すことを強調した。この提案に対して、昨日の午前、バグダッドで首相の主宰下に閣議が開かれ「この重要な決定」がなされた。それだけでなく、首都の当局は様々な町の街区に飾りと照明をつけたクリスマスツリーを置き、「これらの日々にキリスト教徒の共同体に対する「敬意と連帯感を表す」とした。

2003年合衆国がイラクに侵入して以来、イスラム過激派は少数派に狙いを定め何百人ものキリスト教徒を殺害した。その中には一人の司教、試合たち、商人、医者、政治家が含まれる。そのような状況のために、何千というキリスト教徒がイラクから逃げねばならなくなり、彼らの数はこの10年間に200万から30万に減った。